

まわりに支えられての段

竹本駒之助
女流義太夫一代記

【チラシ使用写真】 竹本駒之助七十歳頃

病気の話が続いて申し訳ないですが、前回の公演の後、足が重く、体がだるくて、しんどくてどうしようもなくなり、調べてもらったら胆石でした。六月に内視鏡の手術をしてから少し楽になりました。本当に、年をとると、今まで何でもなかったことが三倍も五倍もかかります。朝早く起きて勉強して……と思うのですが、夜遅くなることが多いとそうもいかず、また疲れているのに眠れないこともあったりして、毎日毎日いつまでもつかいな、と思いつつながら暮らしています。

出かけるときは駅まで主人に車で送ってもらうのですが、主人は朝が弱いので、朝早いときは隣に住む嫁に送ってもらうか、タクシーで駅まで行きます。主婦がこんなに留守にするわけですから、この仕事のことを全然わからない人だったら、とてもむずかしかったでしょう。家で支えてくれてありがたいと思っています。自分でも「あなたは人間国宝かもしれないけれど、僕は“家宝”だから」なんて言ったりしていますよ。留守中に電話の応対をしてもら

うために、一日の予定を伝えて出かけるのですが、最近、次の日の予定を百遍くらい聞かれるようになりました(笑)。外の方から「ご主人は師匠のご予定をよく把握されていますね」と言われるのですが、実際はそんな感じなんです。まったく、二人で一人前どころか、半人前にもいかないくらいです。

主人とは、(鶴澤)三生の引き合わせで出会い(芸の母である)春駒と一緒に嫁入りしたのが二十四歳のときですから、かれこれ五十八年になります。(義母である)三生がすべってお膳立てしてくれた結婚で、結婚式当日に新郎が出て来ない……ですから最初はどうかと思いましたが、なんだかんだで長続きしましたね。家では義太夫の話はしません、主人が公演に来ることはめつたにありません。このK A A Tのシリーズも一度も来ないです。もう年ですからね。外に出ると疲れのみたいで……。

このたび、たいへん光栄なことに、(平成二十九年)文化功労者に選出していただきました。文化庁からまずお電話でお知らせいただいたのですが、そのときも私は留守で、主人が電話を受け、およそのお話をうかがったようです。「(本人は)夕方戻りますので」と、その頃にもう一度かけていただくようお願いしました。私が帰るまで、「まだか、まだか」と出たり入ったり、ウロウロと落ち着かなかったようです。

戻ってから私が文化庁の方からのお電話を受け、お話をうかがいました。真つ先にお耳に

入れたいと思ったのは亡き竹本越路太夫師匠です。本当なら、お受けしますとお返事する前に、越路太夫師匠におうかがいするところですが、もういらつしやらない。亡くなる前、「この先、なにかお知らせがあつたら、僕はいないんだから、必ずお受けさせていたいただきたいね」とおっしゃってくださいましたので、それを思い出してお返事させていただきました。師匠が一番喜んでくださっていると思えます。その後、越路太夫師匠の奥様の三回忌がありましたので、そこでご報告させていただきました。

翌日、いろいろな書類がファックスで送られてきて、紙はないわ、インクは切れるわ、どうやって交換していいかわからずで、私も主人も右往左往して大変なことになりました。お祝いのお電話や電報もたくさんいただきましたが、相変わらず私が留守がちでしたので、大体主人が受けてくれました。

思い起こせば、最初に賞をいただいたのはモービル音楽賞(一九九六年)で、それまでそういうことに縁がなく、賞の名前も知らなかったものですから、マンションかなにかの勧誘かと思つて「間に合つておりますので」と、頓珍漢なお返事をしてしまいました。人間国宝の認定を受けたとき(一九九九年)は、ちょうど越路太夫師匠が国立劇場の文楽公演の稽古でいらして、そこにご挨拶にうかがおうと着替えているときに文化庁から電話があり、襦袢のまま電話に出たのを覚えています。すぐ国立にうかがつて、お稽古の切れ目に越路太夫師匠にお目にかかつて「こういう

お電話がありました」とご相談しました。師匠は「いわゆる個人指定か。すぐここからお返事させていたください」とおっしゃってくださいました。

文化功労者の顕彰式は十一月六日でした。息子が付き添ってくれました。ホテルでの式の後、皇居にうかがいました。

顕彰式は付き添いも一緒に出席できるのですが、皇居の中をご案内いただくのは配偶者だけです。その間、息子は待合室で待っていました。

お茶のお招きでは、天皇皇后両陛下、皇太子ご夫妻、秋篠宮ご夫妻がかわるがわるお声をかけてくださり、お話しくださいました。私のことも「映像で聴かせていただきました」とおっしゃって、「ずいぶん大きいお声を出されるのですね」と、いろいろご存じなのにびっくりしました。皇后陛下は、「同じ時代を生きてきたのですよね」と、微笑みながらおっしゃってくださいました。

同じテーブルに、神奈川文化賞のときも一緒だった詩人の高橋睦郎さんがいらしたのは嬉しかったです。コシノジュンコさんは、「関西人ですから文楽をよく見に行っています。義太夫も大好きなんですよ」とお話しくださいました。堅苦しくない雰囲気、楽しい時を過ごさせていただきました。

その日は、私の結婚式のときに三生が着ていた黒留袖を着て行きました。三生とまた春駒も一緒にいただけただよう、本当に嬉しかったです。またこの度のことは女流義太夫では初めてのことでしたので、女流義太夫の先人の御師匠

様方があちらからエールを送ってくださったのだと、心から感謝しています。



【写真】文化功労者顕彰式にて

今回語らせていただく「袖萩祭文」は、大阪で若太夫師匠、東京に来てから越路太夫師匠にお稽古していただきました。

お二人の師匠の録音も聴かせていただいています。味が違う、情景が違うといいますが、表現が違います。節や音遣いは同じようです。違う節に語っていらつしやるわけではないのですが、声柄、腹力や声の出し方のポイントが違うところがあるのでしょうか。

体力的には、とても若太夫師匠のようにいかなので、越路太夫師匠のように繊細にやらせていただきたいなと思いますし、一方で、若太夫師匠の力強さもほしいなと欲張っています。

この段の登場人物は、袖萩と娘のお君、袖萩の父母、宗任、貞任、義家の七人。お君の出番は少しですが、最近の子役の声が出てくるようになりました。

年をとるとできないこともたくさんありますけれど、若いときにはやれなかったこともあります。いまできることを精一杯語らせていただきたいと思っています。



【写真】二〇一七年十二月公演のチラシ